

「岩屋漁港の絵島」

兵庫県淡路市

淡路島の風景の中心は絵島と言われるほどで、岩屋十景の一番手に上ってくるこの島は、三対山（城山）の直ぐ前に浮かんでいる。東西 22mばかりで南北が 60m、高さ 20mで周囲 400m余り、島の地盤は平坦である。

島上には色々な形をした岩の塊が並んでいるが、古来よりあらゆる器物の形を表しているといわれている。近隣の大和島と同じく、もとは陸地に続いていたものが波浪の作用で島になったものである。

島の土色は黄、朱、褐及び淡黒色で、波模様、唐草模様のような紋理を地層に現している。これが日光に照らされると金色に光る。島の高い所は烏帽子の形になっていて、側面には青松、特に南側の松樹が勢いよく美しく、北側の一本が沖に向かって生えるその枝ぶりは絵のような趣がある。また、その月夜の夜景の美しさも、どれほどの詩人、画家であっても写し難いと言われるほどである。

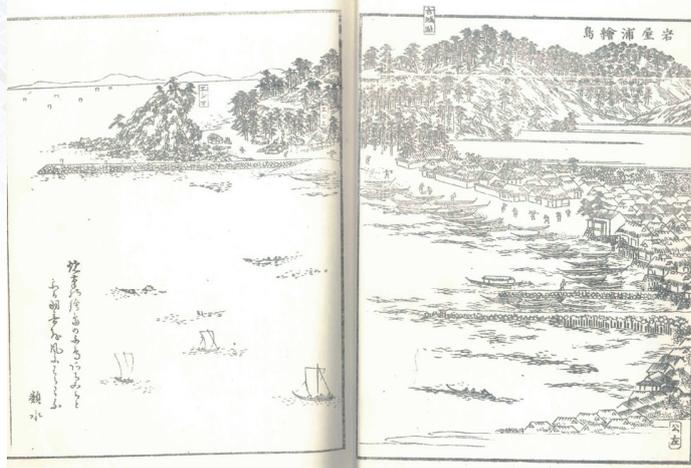
島の頂上の石塔に祀られた松王丸は、讃岐、香川の城主大井民部某の嫡子で、平清盛の侍童となり深く寵愛を受けていた。しかし、清盛が大輪田の泊の築港を始めるあたり、生田の森に関所を構え、人柱※として通り合わせた旅人三十数名を捕らえ、これらの罪なき人々の哀れに泣き叫ぶ声が日夜絶えなかった。これを松王丸が聞き、憐れんで義心を起こし、強いて清盛に頼んで三十数名の命に代わり、自ら人柱となって築港を完成させたという。

平家物語には、「平家が福原の新都に移った当時に於いては、栄華の夢に耽った人々が名所の月を見んとて、或いは源氏の大將の昔の趾を偲びつつ須磨より明石の浦つたい、淡路の迫門（セト）を押し渡り絵島が磯の月をみる」云々とあり、当時は景勝地であったことを伝えている。



明治時代の絵島

【参考資料】淡路町編「淡路町風土記」（昭和 46 年）



絵島周辺の古地図（淡路国名所図絵 巻之一より）

（※人柱 昔橋柱を立てようとして人を生きながら水底に埋めること。河や海の神への生贄の意味もあった。）